

「知の技法の伝承」シリーズ①

# 「今、民俗学の分野では」

熊本大学大学院社会文化科学研究科教授

安田宗生



熊本大学大学院社会文化科学研究科

F D 委員会編

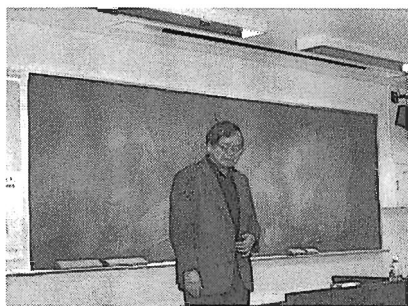
## 「知の技法の伝承」シリーズ開始にあたって

熊本大学大学院社会文化科学研究科長

高橋 隆雄

文系の学問と理系の学問の相違点はいくつかあるが、学問の方法論の違いは中でも重要なものである。たとえば、工学部を例にとれば、電気、電子、機械、原子力、材料、資源、建築など個々の領域ごとにそれぞれ異なる原理や方法が登場し、扱う対象も違うが、大本のところには物理学や化学の基本的法則や定理がある。それに対して文系はどうだろうか。哲学が理系を含む諸学の基盤にあったのは遠い昔のことであり、今では、文系の諸領域の基盤となる原理は存在しない。そのみならず、個々の学問領域の中においても種々の原理や方法が存在するというのが現状である。理系では共同研究が多いが、文系では少ないというのも、

このような事情によっている。今回「知の技法の伝承」シリーズを始めた理由の一つは、それぞれの領域の方法論、つまり知の技法を学びあうことにより、これまでしばしば指摘されてきた文系諸領域のタコ壺化を防ぐことである。21世紀は、地球規模の環境問題をはじめ、近代という時代の制度疲労として生じた諸問題に、学問の総体をもって対処するという課題を担っており、学問間の連携が不可欠な時代である。また、知の技法の伝承のセミナーは、教員の教育・研究を再検討し能力を向上させる格好の機会となるものであり、いわゆるFD活動の一環と捉えることができる。これが本シリーズを創始する第二の理由である。



## 「今、民俗学の分野では」

熊本大学大学院社会文化科学研究科教授

安田宗生

このたび、FD研究会から「知の技法の伝承」というテーマで、なにか話をしろということでしたが、何かお役に立つことがあればと思い、定年退職を目前にしながらも、文化庁に提出せねばならない大部の報告書の作成やらなにやらで、めっちゃくちや忙しい最中ですが、お引き受けした次第です。

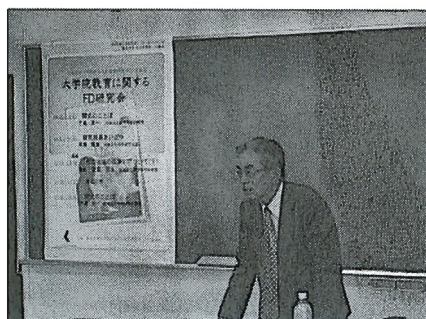
さて、本学の大学院が改組する時に私がその担当になりました、今の文学部長の大熊先生と一緒に色々な大学等に話を伺いに行きました。

その当時は文部科学省が、いわゆるスクールとしての大学院、ということをお願いしまして、要するにちゃんと授業さえ受ければちゃんとした研究者になれるんだ、というような教育システムを提示しておられたわけでして、それについて色々な大学でお話を伺ったのですが、ところがどうも文学部についていうとそういうのはかなりなじめない部分があるのではないかという風に思いました。

これは私が民俗学という学問をやっているせいもあると思います。民俗学では特に野外調査をやりますが、その方法について、授業でも学生に教えます。例えばどういう所に民俗がたくさん残っているか、どのように調査地の見当をつけるかといったことです。まず浄土真宗地帯は外しなさい、それから意外と民俗が残ってないので行き止まりの集落は外しなさい、とかです。一方、禅宗

系統、浄土宗は比較的民俗を残しておりますから古いものが残りますよ、あるいは水田地帯の方が集落としてのまとまりが非常によく、畑作地帯は結構集落のまとまりがないぞ、というようなことがございます。それはあくまで一般論的な話でございます。で、特に生業が大きく変わったところは行事がかなりなくなります、ということを言ったりします。あるいは一番民俗がちゃんと残るかどうかというのは婦人会が存在しているかどうかということが大きくて、その地区に調査に入る前に婦人会がありますかと聞いて、「ああ、活動してます」と言われたら民俗が残っている、そして婦人会がないところはかなり変化している、そういった一応の話というのは出来るわけでございます。

ところが、実際に調査に行きますと、必ずしもすべてにおいてそれがあてはまるわけではなく、いろいろな集落の性格があつて、違つてくるわけでございます。私が学んだ大学では調査実習というのがありまして、これは各先生方が調査されるのを横で聴いていくというものです。それで、ある先生は話者の家に入る時に玄関を見て、そこに神社やお寺のお札が貼つてある、それを見て入っていくなりお年寄りにあの札はなんでしょうか、とこういう風に切り出す。つまり、調査に來ました、こういうことを聞きたいんです、というのではなくて、何となく話題を振つて調査に入っていく、というやり方をします。ところが我々の恩師の中には戦争世



代で、あなたはどこの軍隊にはいつていたんですか、というとお互いに戦友だという気分になって非常に話が盛り上がる、ということがありました。で、私の世代ではそういうことはできないので、先生方のそういう調査方法を見て、軍隊を持ち出すのは反則でしょうという感じがしておりましたが、よくよく考えてみますと要するに、そういう先生方のやり方を我々がまねても仕方がない、ただ先生方のそういう入り方を勉強して、自分なりに工夫していかないと話は聞けないんだ、ということ学びました。特に話の聴き方のうまい先生というのがいらつしやいまして、一時間話者が話している間に質問しているのは三つか四つしかありません、あとは全部話者が話していてしかも聞きたい話は全部聞いているんですね。そこでこの先生はどうしてこんなにうまいんだらうということを観察していたわけです。そうしてよくわかったのは、先生方は長い調



査経験の中でこういう話題を出していくと話者はこういう話をしたがるということを経験則的に覚えておられる。だから自然にそういう方向に話にもつていつているわけです。つまり調査に対して答えたというのではなく、「いやあ、今日はよかった。久しぶりに昔話ができたよ」、「よかったね、こういう機会があつて」、「またこういう話をしたいね」といつて帰つていかれる、そういう調査が我々にとって一番理想の調査だといわれるわけです。先生方はそのことを身を以て教えておられたのだと思います。要するにその点を「見てなさい」と言っている訳です。見ないとだめなんです、多くの人たちのやり方を見て、自分なりに工夫していくということが多分一番基本になつてくると思います。

私はやはりそういった意味で「見る」ということが非常に重要なことだ、という風に思っております。これは祭りでも何でもそうですが、「見る」というこ

とがまず基本でございます。そして学生を調査に連れて行った時に「あ、こういうことを聞いてきた」、「わあ、こういうことがあるんですね!」と言ってくるんですが、我々にとってそれは常識的な部分、いうなれば「何だ、今頃そんなことに気付いたのか」ということになるわけですが、多分それを言うとかダメなんだろうと思います。その学生がそういう風に感動したことを「ああ、良かったね」といってどうやって伸ばしていくか、ということがおそらく一番必要なことになろうかと思えます。私もやはりそういう風にして育てられてきたような気がいたします。で、やはりそういう風に見ていく、そして覚える、そういうことだろうと思います。

これはある種非常に職人の世界に似ていると思います。肥後象嵌で有名な米光太平という人間国宝の方がいらっしやいまして、私はその方の記録映画をつ

くったことがございます。ある時米光さんが言うに、「職人が技術を弟子に教えない、というのではない。つまり教えること自体がダメなんだ」ということをよく言われるわけです、それは見て覚えるものだということでもあります。そう言われてみると、教室で学生に教えたことというのは、学生はすぐに忘れるわけです。ところが自分で調査に行ってきた、聞いてきた話というのは忘れないわけですね。だからどうしても自分でやったことが一番身につくということだろうと思います。やはり職人の世界も同じようなもので、それを米光さんもおっしゃる。で、どの職人さんにお会いしても、「私は技術は隠してません」というんですよね。ところが、傍から見ていると全部隠しているんですよね、肝心なことは教えてくれません。ところがそれは、教えても仕方がないんだ、つまり体で覚えなければ本当の技術にならないということを多分職人さんはご存知

だったんだ、そういう風に思います。で、米光さんの映画を撮っている時に（肥後象嵌というのは、一度錆を出してから錆止めをする、という非常に難しい技術をやります。これは京象嵌や加賀象嵌と違うところで、これらは錆が出る前に錆止めをしますので割と明るい色の象嵌ができるんですが、肥後象嵌は錆を出させますので大体暗い色調になってくるのが特徴なんです）それを撮影する時にお弟子さんたちがみんな仕事をやめてその錆止めの作業をじいっと見ているんですね。で、米光さんは、「いやあ、これは教えても仕様がないんだよ」という風におっしゃるわけです。

つまりこれはどういうことかというと、鉄の素材、それから、錆止めをする時の湿度とか気候ですね、特に梅雨時であつたりとか、冬であつたりすると、全然時間が違う。だから一概にどうだということとは言えない、ということと言

うわけです。多分お弟子さんたちもそれを知っていますので、じっと見ながら自分なりに自分ではどうするかということを考えていくというのが、多分、職人さんたちの世界の技術の習得の方法だろうと思います。

で、こういう手法というのが非常に民俗学とよく似ておりまして、我々も調査に行つてこういう風に聞きなさいという形は取れないんですね。例えば、今ぐらゐに調査いたしますと、一年間の行事を聞く時でもできるだけ季節感に合わせて聞きますので、今ぐらゐだったら、昔の大みそかはどうですか、師走はどうでしたか、というところから入っていきます。で、夏になれば今年のお盆はどうでしたか、というふうな形で話を聞いていくわけですが、ただ話者それぞれ個性がありますので、そういう聞き方をすれば聞き出せるという訳でもないんですね。さまざまです。だからその場その場でないと対応できませんので、

どうしても、教科書で教えるようなことでは調査が出来ない。ですから一対一でやっていくということがどうしても必要になって参ります。で、調査に行きましても、お祭りを見るにしても、どこをどういう風に見ていくかというのは、現地で指導するしかありません。で、踊りを見たときに、この踊りはどういう踊りだ？あるいは、踊りを見るときは、どこを基本に見ていきなさいという風に教えていきます。で、そうしないとダメなんですね。だから教室ではほとんど教えられないことが多いわけです。

ところが、この頃の学生さんというのはあまり調査に出たがらない。調査に行くとお金もかかりますし、この頃ご時勢が変わりまして、若い学生が来ると、詐欺商法の人 came たんじゃないかという風に思われるためなど、行政側の教育が徹底してまして、なかなか怪しまれて調査ができない状況です。仕様が

ませんので、我々は教育委員会などを通してそのあたりの事情を説明するといふ必要もあるわけですが、それにしても基本的に調査をしたがらない、これが一つ問題であります。

それともう一つはなかなか自分のやりたい事は決めても、それ以外のことに関心を持たない学生が増えてきたように思います。極端な話をしますと、私どもの研究室に三人いたら三人が、自分の好きなことはやっているんだけども他の人がやっていることは知らないよ、という状況になってきております。ですが、民俗学のような学問は、自分が関心を持っている領域だけやればそれで済むという話ではありませんから、いろいろなものを勉強していかないといけなくて、一見関係なさそうなものも、調べていくと非常に関係が深くなったりということもございますので、やはりできるだけいろんな分野に関心を持つ学

生であつて欲しいという風に思うんですが、それがなかなか今はできてないのではないか、ということがあろうと思います。

それと、多分民俗学にとって重要なのは、要するに自分でやってみる、ということだと思います。今私どもの大学院の方の修士課程ですが、調査は学生に企画させております。基本的にどこを選択して調査対象として選んで、何をテーマに、どういう風に調査するかというのを、全部院生に一応企画させてやらせております。そして報告書の作成まで全部院生でやるという風にしております。院生が調査致しますと極めて失敗する例が多いんですね。昨年の調査も必ずしも成功したとは思いませんが、やはり学生にそういうことを任せてやらせるということが多分大事だろうという風に思っております。そしてそこでやる理由というのが、実は民俗学にとってひとつ重要なのは大学院生の中には、や



がて専門に博物館なりあるいは文化財行政の方面に就職して行っている学生がいるんですが、そういうところに行きますと、必ず組織で調査するということが要求されてまいります。通常は個人で自分の研究テーマに従って調査地に出かけていって、ということはある程度できるんですが、今度は組織として調査団のようなものをつくって、それを引っ張っていかないといけないということが起こります。

そうした場合に、何が必要なのか、ということも覚えてもらわないといけないんです。つまり非常に熱心にやる学生もいれば、それほど熱心にやらない学生もいる。そうすると、ある部分については非常にデータが集まるんだけど、ある部分については集まらない。で、そういう場合にどうすればそれなりの全体的な調査ができるのか、ということを学生にやらせております。そしてもし

その後失敗した場合に、特に、どこで失敗したのかということを学生にきちつと認識してもらうようにしております。今年も八月に調査に行きまして、今、その報告書の最終とりまとめでして、三月までには印刷物にして出すということにしております。今年は宇土の地蔵祭りをやったんですが、これは研究者の間では全国的にも非常に有名な祭りでございます、おそらく全国の研究者は必ず見ているものなんですね。そして報告書が出ることを注目しているわけですので、それにちゃんと耐え得るような報告書をつくってくれとお願いしているわけです。そういう風にして、調査そのものがうまくいったかどうかは別にいたしまして、実際の調査ではかなり漏れがでておりまして、やはり学生が考えることです。パーフェクトにはできないわけですし、今それを修正しながら、八月以降、何度も補充調査に行かせつつ、やっております。そして報告書

を作成するということまでやらせております。ですから、どうも民俗学にとって一番重要なのは、いろいろな知識を教えるということも非常に重要ですが、実はそれに基づいて自分たちが実際に動いて、見て、そして経験していくということが多分一番重要なことで、それができればちゃんと一人前の研究者になっていくのではないか、という風に思っております。

それと民俗学の分野の特徴というのは、歴史的な研究をしていくタイプの人がいるということです。例えば宇土の作り物というのがありまして、「生き人形」で有名な松本喜三郎という作家は、地藏祭りの人形を作っていて非常に有名になった人物なんですね。このように江戸時代からそういうものをつくってきた伝統というものがございます。で、そういった伝統がどこから来るのかということ聞きますと、大体江戸時代のことまで調べないとわからないわけです。

そのために歴史的な研究ということになりますと、本当は日本史の方などと共同でテーマを設定して、学生間で調査ができればいいのかなと思ったりもしていますが、そういった方向性の一方で、現代のことを扱って、むしろ社会学などと連動してやっていくという側面もあります。

そのどちらも民俗学としては大きなテーマになっているわけでして、ただ私が見たまま歴史的なところに非常に関心があるため、近世以来のいろいろなことを調べている関係上、そっちの方に動いているということなんです。だからどちらを選ぶかは学生の好みです。ですから、一応私のところは日本史ではありませんが、古文書の研究会を開いて、学生に古文書の勉強をしてもらう、ということになっております。

したがって民俗学だけではどうも今のところ研究ができませんので、できる

だけ日本史などの学生とコンタクトを持って欲しいな、と思っております。そういうやり方というのが民俗学のやり方でございます。

ところがそれ以外に実はまだございまして、文化財行政とかあるいは博物館に就職するには「モノ」が分からないといけないんですが、その肝心の「モノ」が教えられない。つまり教室ではそれは無理なんです。といいますのは、まず「モノ」がありませんので。ところが学生は就職すると、見たことも聞いたこともないような物を扱わないといけない、という話になるわけです。ですが、熊本大学にはそういったものを集められる場所もなければ、そういうものをどういう風に撮影していくのかということもできない、ということになっており、そういった意味では非常に難しいと思っております。それで、見ないと分からないのは「モノ」と芸能なんです。芸能もですね、見ない限りはダメなんです。

ね、ところが、見るためにはすごくお金がかかるわけです。そんな時間もなければお金もない、というのが現実でございます。だから極端に言いますと、今、民俗学専攻の就職先として考えられる博物館や文化財行政に一番必要とされる部分を、実は大学では教えられないということなんです。これは別に熊本大学だけではなくて、全国の民俗学専攻を置く大学が抱えている問題だろうというふうに思います。そうした中で、漸く神奈川大学が対応できるようになってきているとは思いますが、非常に難しいという風に思います。

さらに、特に難しくて一番問題なのは、写真の撮影技術と図面の描き方なんです。写真は文章と違ってごまかしがききません。非常に難しいんです。例えば芸能の研究では報告書を作成しますが、その際、口絵に使う写真は全てプロのカメラマンに撮ってもらっているんです。つまり我々が撮るような写真で

はダメなんですね。それは一般の方々がご覧になっても分からないと思います  
が、民俗芸能の専門家が見ますと、写真一枚でわかるんです。こんな写真を口  
絵に使って、といわれるぐらいにわかるんですよ。決定的な場面がどこか、  
ということが分かってないと口絵は撮れないということでございます。例えば、  
菊池に「松囃子」という伝統芸能がございまして、これは私も参加して報告書  
を作成し国指定にしたんですが、わずか十分かそこの芸能で、私も写真を七  
十二コマ撮ったんですが、使える写真がない。で、たまたま芸能撮影専門のプ  
ロの方が来られていたので、その方が撮った写真を口絵に使いました。実はそ  
れくらい芸能の専門家というのは厳しいんですね。だから写真一枚でその人の  
力がどこまであるかということがわかる。そして角度とタイミングというのを  
きちっと押さえていかないといけない。実はそれを教えないといけないという

ことで、写真の撮影の仕方を教えております。ただ私は、年をとってダメなのは、デジカメが普及しまして、その撮り方がわからない。あれは非常に難しい。つまりシャッターを押してから実際に撮影するまでに若干のズレがあつて、それが非常に問題なんです。だから自分としてはタイミングが合っているはずなのに、零コマとか一秒ぐらいのズレがあると、芸能は動きますから、非常に難しいんです。それと、年をとると眼が悪くなつて枠が違ってくるんですね。自分としてはこの枠でとったはずなのに、あがつて来るとズレていまして、年を取ると写真も撮れないんだなと思ひまして、この頃は写真を一枚も撮っておりません。ところがデジカメのいいところはバチバチ撮れるところです。例えば先日、八代妙見祭の、砥崎の河原で飾り馬が暴れる場面、大体一時間ぐらいのもんですが、その間に一〇コマぐらいの写真を撮りました。デジカメは気



楽に撮れますから、そのうちの一枚ぐらいは下手な鉄砲も数撃ちや当たる、というところで出来るかもしれませんが、それをやるとただ記録を取っていけばいいだろうということで、バシャバシャシャッターを押しますが、実は観察が出来るんですよね。だから写真を撮ったけれども、では良く見ていたのかという、そういう風にはならないという、非常に矛盾することになります。従いまして、私たちのところでは調査をする時は、必ずカメラを撮る人と記録を取る人と二人ひと組で動かすという仕組みでやっているんですが、ところが意外と観察している方が細かく見ております。

それから「モノ」というのも非常に難しいんです。これは考古学などが特に写真にはうるさいと思うんですが、あれは写真一枚撮っただけでその学生の實力がわかるからなんです。図面の描き方一つで、その人の實力が分かるからで

すよね。だから考古学の人たちは図面描くの に必死になってやっているわけ  
です。で、民俗学もそれがあります。「モノ」の写真を撮った時に、こいつ分かっ  
てないぞ、という撮り方になるんですね。それは、物の機能がどこにあって、  
一番重要な機能はどこかということが、はっきり分かる角度から撮らないとい  
けないんですね。だから物の使い方が分かってない限り写真も撮れない、とい  
うことです。従って、その物がどういう風に使われるかということを教えない  
限り、実は写真も撮れないということなんですよね。ところがそれは現地に行  
かないとできない、あるいは博物館の倉庫に行かないとダメなんですよね。実  
際に物を見せてやらないといけない。ところがそういう機会が、実はない。で、  
大学ではモノなんか集めようがないわけですから、そういうことができないと  
いうことになります。そしてそれを図面に撮るといいう話になります。で、図面

の撮り方は、実はこれも国の重要民俗文化財に指定する時は、全部実測図をつけないといけないことになっているんです。これはもう実測図をつくらない限り、国の指定にはならないんですよ。ですから民俗学の学生にもそういうことをやろうとすると実測図が描けるような教育をしないといけないんですが、それができません。まず実測すべきモノがない、場所がない、ということなんです。だからその辺がちょっとジレンマでございます。ただ、それだけが全てではなく、一応精神文化を研究していくという部分もあるわけでございますから、それはそれでいいんだろうと思います。そういったことを考えておりますとどうも、「見る」ということと「やらせてみる」ということ、この二つをどう組み合わせさせてやっていくかということが、多分、民俗学にとっては一番重要な話なんだろうという風に思います。ところが今は授業などで時間を取られ

て、なかなか学生を調査に連れていけない。非常に難しいかと、私などは思っております。今、調査も何ヶ所も入っておりますけれども、これから一月、二月になるとまた調査ということになるとと思いますが、どうも授業に縛られてなかなかうまく調査に行けないということがございます。その辺をどういう風に工夫してやっていくかということになると思います。昔は七月から休みでしたから調査ができたんですが、今夏休みは八月からになりまして、八月はお盆の時期にあたってきますので、調査が非常に難しい時期に入ります。そうすると学生は休みに入ってしまうといなくなってしまう、いつから調査を始めるんだという話になると、学期が始まる前とかですね、となってしまう。で、途中で集中講義が入ると、これはもうダメですよという話になってきまして、段々調査がしにくくはなっております。

それからもう一つ、個人情報保護法との関連で、非常に民俗学的にいうと調査が難しいところがあります。昔は調査をする時にそれぞれのお宅の宗派を聞いていたんですが、これが昨今は、宗教調査だという話にもなりかねない状況になっておりまして、実は今、天草の崎津というところで、キリスト教遺産ということで世界遺産の登録を目指している調査があるんですが、そこでいわゆる隠れキリシタンといわれている人たちの調査をやりましたら新聞に、これは宗教調査ではないかということになりまして、テレビでも取り上げられまして、非常に難しい状態になっております。多分これから社会学や宗教学会も同じような状況になると思いますが、これは非常に厳しいことなので、ガイドラインが必要になってくるんだろうと思います。そこで民俗学会でも班を設置しまして、どういう風に対応するかを検討しておりますが、一番怖いのは学生が調査

を行った場合に、管理がどうなるのかといった問題です。ですから先程の崎津の話ですが、それは熊本大学が調査しているのであって、調査データは熊本大学が厳重に保管して、外部に漏れないようにしているということとで納得して頂いたんですが、「でも実際に調査に入っているのは学生でしょう、その学生の調査したデータはどうなるんだ」という風にいわれてしまい、困ったなという次第でして、全国的になかなか調査がしにくい状況にはなっております。しかしこれはやはりどうしても調査に行って頂いて、自分で見て、いろいろなデータを集めて、その中から面白いものを見つけていってというのが基本です。なので、そういう意味でできるだけ学生が調査に出られるようにすること、そしてその調査を我々ができるだけ支援できるように体制を調べていくということが、多分、一番必要なんだろうと思います。そして学生がやってきた、あ

るいは見てきたことをどうやってうまくエンカレッジしながらやらせていくかということが、一番重要かなというふうに思っております。だから、私のやり方というのはありますが、それがそのまま学生に受け継がれるわけではなくて、わたしのやり方を見て、学生が自分はどうすればいいかということを考えていく、そして私のいいところがあるとすれば、いいところを、あるいは悪いところはこういう風に直せばいいか、という風にやっていくということが、多分、一番必要なのではないかなという風に思っております。それが次の世代に受け継がれていくことになるのかなと考えております。

与えられた時間がまいりましたので、以上にしておきますが、皆さん、熱心に聴講していただき、有難うございました。

## 安田宗生教授 略歴

一九四四年一二月 福岡県に生まれる

一九七四年 三月 東京教育大学大学院文学研究科修士課程日本史学専攻(史学方法論)修了

一九七五年 四月 熊本県教育庁文化課学芸員

一九七八年 三月 東京教育大学大学院文学研究科博士課程修了

一九八〇年 三月 熊本県教育庁文化課退職

四月 熊本大学文学部講師

一九八二年 九月 熊本大学文学部助教授

一九九九年 八月 熊本大学文学部教授

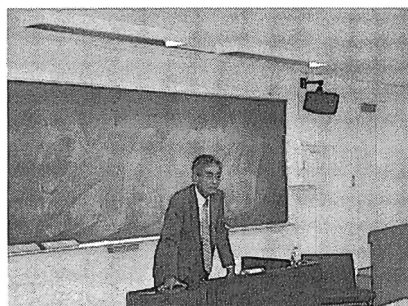


二〇〇八年 四月 熊本大学大学院社会文化科学研究科教授

熊本大学六十年史編纂室室長(兼任)

二〇一〇年 三月 定年退職

四月 熊本大学六十年史編纂室室長



主な著作等

『肥後の琵琶師―近世から近代への変遷―』

三井弥書店 二〇〇一年

『美當一調・桃中軒雲右衛門関係新聞資料』

龍田民俗学会 二〇〇四年

『近代熊本の劇場、活動写真、及び大衆演芸』

龍田民俗学会 二〇〇七年

「都市祭礼の成立と展開―八代妙見祭を例として―」『東アジアの文化構造と日本的展開』

北九州中国書店 二〇〇八年

『国家と大衆芸能―軍談師美當一調の軌跡―』

三井弥書店 二〇〇八年

## 編者あとがき

この冊子は「大学院教育に関するFD研究会」の一環として、「知の技法の伝承」をテーマに、平成二十一年十二月九日（水）一四時四〇分～一六時の間、本学法文棟A3教室を会場にし、講師に安田宗生先生をお迎えして開催されたものの講演筆録です。

先ず、年度末のたいへんお忙しいなか、本冊子に玉稿をお寄せいただいた高橋隆雄先生にお礼申し上げます。高橋先生は、皆様よくご存知のとおり、新生なった熊本大学大学院社会文化科学研究科の初代研究科長として、余人をもって代え難きご活躍をされてこられました。が、本年三月末をもって任期満了となり、ご退任されました。ここに謹んで長年のご労苦に対し、衷心より感謝の意を表すとともに、近い将来、高橋先生にもぜひご登壇していただきたく願っております。

また、このたび本シリーズの先陣を切って語っていただいた安田宗生先生におかれまして、本年三月末をもちまして定年退職のお運びとなりました。熊本大学文学部『文学部論叢』第一〇一号（二〇一〇年三月刊）に掲載されました、鈴木寛之先生の「安田宗生教授を送る」ことばによりますと、「ふだん先生がご自身の研究について語られる機会ほとんどないのだが、……」とあり、斯学において、今回の安田先生の「語りおろし」がいかに貴重なものであるかが察せられましょう。なお、先生はご退職後も週三日ほどは「熊本大学六十年史」編集室長のお仕事で引き続きご通勤されとのこと。先生のますますのご活躍と弥栄をご祈念するしだいです。

最後になってしまいましたが、本学社会人大学院教育支援センターの坂田一浩さんと渡邊朝美さんに深甚なる感謝を表します。坂田さんには煩雑な日常業務の合間を縫って本冊子の

基となったテープ起こしをしていただきました。渡邊さんには編集その他ごまごまとした雑務一切を取り仕切っていただきました。仮令、小なる冊子と雖も、お二人の大なる助けがなかったら本書を産み出すことはできませんでした。改めて厚くお礼申し上げます。

既に、本シリーズの第二弾として吉田勇先生のバージョンを鋭意準備中です。楽しみにしてお待ちいただけましたら幸いです。

三月吉日

編者 識

2010 年 3 月 31 日 発行

「知の技法の伝承」シリーズ①

「今、民俗学の分野では」

発行 熊本大学大学院社会文化科学研究科  
FD委員会

印刷 ホープ印刷株式会社